

214. 長浜市大東町の 力持石について

1. 力持石の由来

長浜市大東町の集落のほぼ中央部に円明寺という真宗は仏光寺派の道場があり、その御堂前の広場に力持石と呼ばれる石があります。それは扇風機もない昔々、この広場が集落内の人々の夕涼みの場になっていた頃、ここに集まった人々が互いにこの石を持ち上げ、力の強さを競いあったというものです。

地元の長老で明治35年(1899)生まれの宮尾嘉平氏の近著『大東町昔話しのあれこれ』^①によると、この力持石については次のような話が記されています。

「当大東の人は昔しから体の丈夫な人が多く、秋の取り入れが終わると岡谷迄炭を買いに行かれるのが習いとなって居り、庄三エ門、治左エ門、友左エ門と三人が買いに行かれ、四俵づゝ買ひ、2俵を一くゝりに棒を通して、前後二俵づゝ帰って来られ、木尾(字名)にて休息され、字の広場に置かれた力持石をさげて見て、持てるか持てんかを見てから腰を掛けて休息して居られたら、其れを若象に見られ、字の若象頭が出て来られ、字の力持石に腰を掛けるとはと色々口論の末、かたねたら呉れるかと言はれたら、言葉のはずみでかたねて持って帰へたら呉てやると言はれ、其れならと買ふて来た炭を、一人の炭を二人に分け三俵づゝとし、炭は二人荷ひ力持石は肩にし、三人互いに肩から肩へと移して大東迄持ち帰られたが、木尾町の若者は今庄町迄ついて来たと言ふ。」

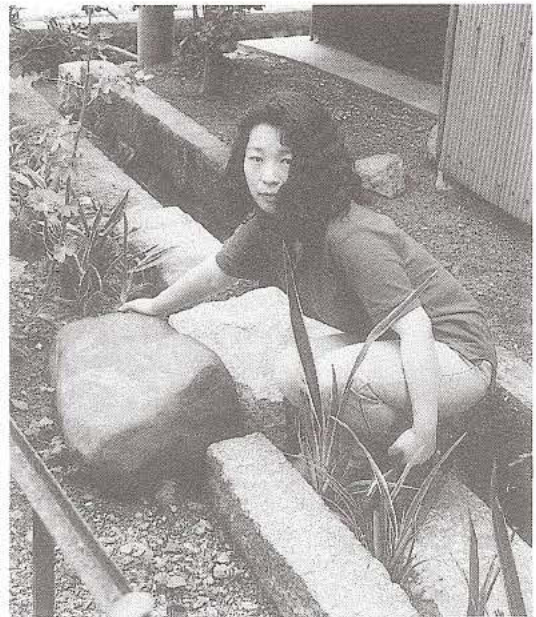
力持石についての如上の由来譚は嘉平氏の祖母にあたる「おたけばアさん」からの伝聞とのことなので、おおむね幕末から明治のはじめ頃にかけての出来事と推測されます^②。岡谷、木尾、今庄はいずれも現在の東浅井郡浅井町内に確認できる大字名で、これをすべて通過するようにして、明治26年頃(1893)の地図上でそのルートを想定してみると、大東からの3人はそれぞれ4俵づつの炭俵を荷なって岡谷から木尾までの約6.25kmを歩いた後、木尾からは力持石を加えて今庄まで約8.25km、そして今庄から大東まで約8.75kmの道程

を歩いたこととなります^③。

こうして力持石はついに約17kmの道程を運ばれて、大東にもたらされましたが、「其の後、石は三人取合ひになり、夜になると三人とも自分所を持ち帰り、最後には庄三郎氏が家の裏にある泉水に沈め置き取合ひされたが、終わりには字の所有物とし、字内の力持石となり」^④、円明寺前の広場に置かれたということです。

2. 力持石の特徴

以上が大東町の力持石について知られる事柄であります。これを踏まえてあらためてこの石を眺めてみると、この石がかつて当地に住んだ人々の生活を雄弁に語りかけていることに気が付きます。たとえば、この力持石が遠く木尾から持ち帰られたのは、大東には秋の収穫後、現在の浅井町方面へ炭を買いに行く習わしがあったためであることなども、そのひとつとしてあげてよいでしょう。そうしたなかでもここで特に注意したいのはやはり、この力持石が約17kmの道程を持ち運ばれてきたことに加えて、村人が相集いこの力持石を互いに持ち上げて、力の強さを競いあうということが、娯楽のひとつとなりえたということです。



円明寺前の力持石

そこでこの力持石そのものを観察してみると、以下のような特徴を有していることに気が付きます。

- a 黒色の自然石だが、表面がつるつるであること。
- b 「麦なり」^⑥の形状を呈し、最大長約72cm、最大幅約39cmを測ること。
- c 嘉平氏によれば重さは32貫で米2俵分の約120kgはあるということ^⑥。

これらの3つの特徴^⑦のうち、aとbはこの石を持ち上げようとする人が遺憾なく力を発揮するために必要な特徴であります。ここで最も重要なのはcの特徴がもつ意味であると思われまふ。と言うのもcの32貫という力持石の重さは、人力ではどうしても持ち上げることのできない重さではなく、そうかと言ってそう簡単には持ち上げることのできない重さでもある。つまりこの重さは力自慢の人ならあるいは持ち上げることができるかも知れないという、ちょうど良い重さであり、ここにこの力持石の力持石としての「妙味」が存在したものであると思われまふ。そして実際にこの石が力持石として存在していたということから、過去にはこれを持ち上げられるような力自慢が、少なからず存在したということがうかがわれまふ^⑧。

3. 力持石の時代

ところで宮本常一氏が昭和31年（1956）に、愛知県北設楽郡設楽町において採録した「名倉談義」^⑨中につきのような会話があります。それは当時いずれも70才以上の老人達4人が、自分が経験してきた農村生活の實際を座談会風に語ったものです。彼等は明治十年代生まれであることから、嘉平氏よりはやや年長の人達であります。大東町の力持石が力持石としての妙味を發揮していた時代の状況をうかがい知るうえで、少なからず参考となると思われまふ。

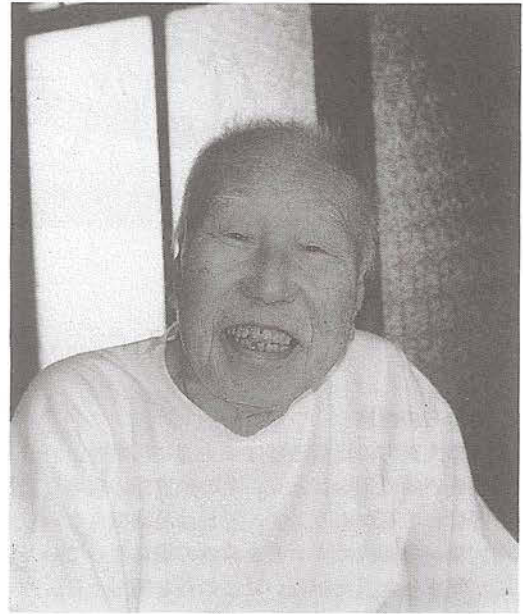
※

「昔はまア、うまくないものを食うて、よう働きました。私の亭主は朝おきてから夜ねるまで草鞋をぬいたことがなかった。…」

「…百姓仕事の中で一ばんえらかったのは田打ちであります。わしら一日に一反うった。…」

「田うちはユイでやりました。一人ではとてもうてるものではない。それで元気なものならんでうちます。…たいてい八人くらいならんでうちます。金平さんは働きもんで、六株ずつおこしていく。わしら四株うってもなかなかついて行けなかった。それで時々ごまかしたもんです。それでも一日中荒おこしをすると手にまめが二十五も出た。それからタコになる。」

「わしゃ働きましたのう。昔の備中は穂先が長くて一尺二寸、目方も八百目という大きなもんでした。柄をつけて一貫目はあった。それを朝から晩までふるう。わしゃ備中一本で一町四反つくった。」



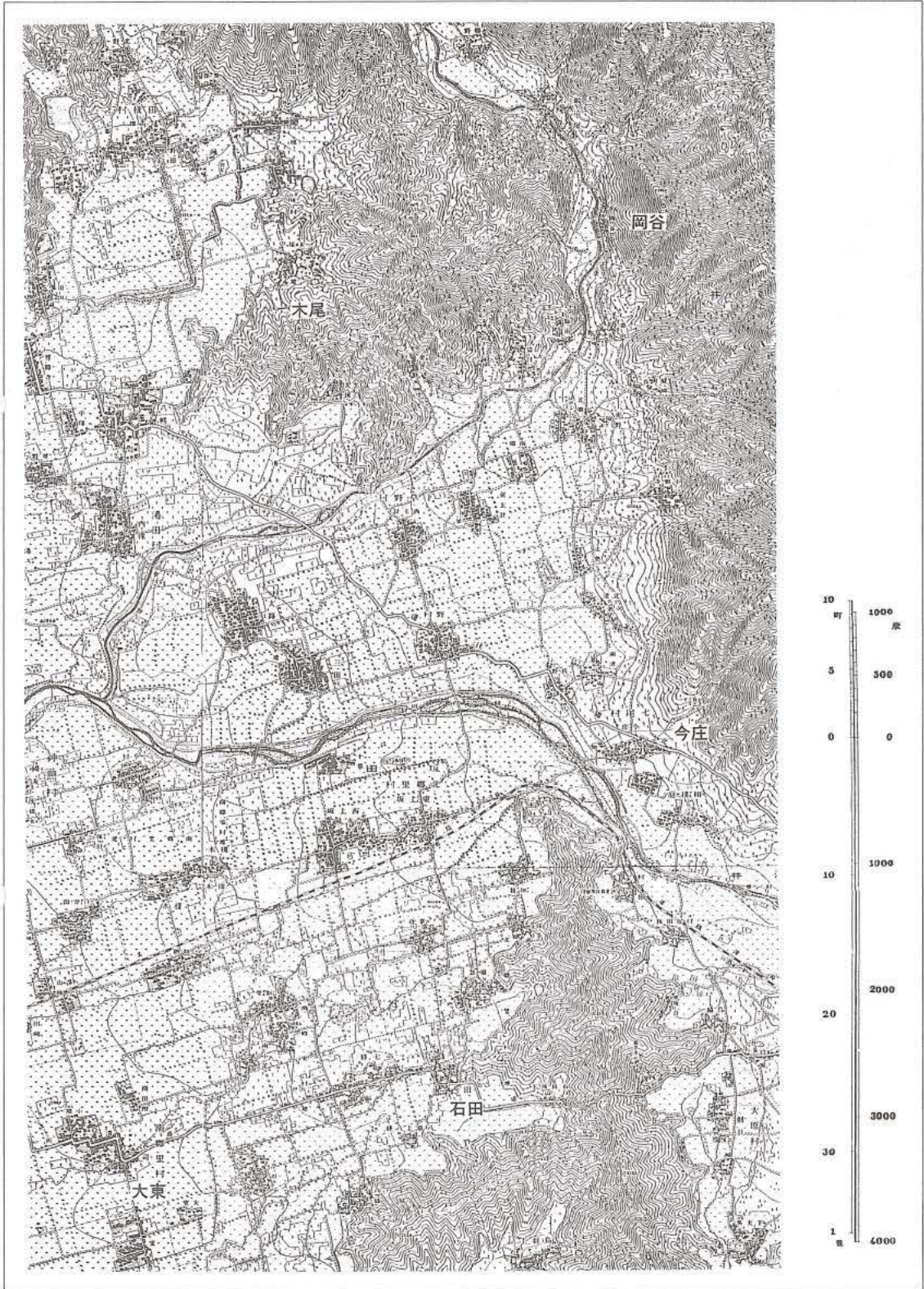
談笑する宮尾嘉平氏



力持石の重量測定風景

4. 力持石の意義

大東町の力持石の存在は嘉平氏より一世代のちの人達、すなわち現在60才代の人達の脳裏からもすでにほとんど忘れ去られようとしています。それは扇風機やクーラーが登場し、また夕暮れ時の娯楽が多様化したからというばかりでなく、もはやこの石を持ち上げられるような力の持ち主が、この集落内にはいなくなったということも、大いに関係があるのではないでしょ



力持石が運ばれた道程(木尾→今庄→大東)

うか。つまりこの力持石は、そうした力自慢がいた時代、言い替えればほとんどすべての労働が、現在のよう
に機械ではなく、人力によっておこなわれていた時代、
そうした時代に生きた人々の生活のありさまを物語る、
貴重な歴史的遺産といってよいのではないだろうか。
(北村 圭弘)

註

- ①宮尾嘉平「第十四話 字の力持石の因縁について」
（『大東町昔話しのあれこれ』北村書房 1993 プリ
ント版）
- ②嘉平氏の父親が万延元年（1860）生まれであること
から推測される（注①文献第三話）
- ③岡谷から木尾を経て、今庄経由で大東に帰ると、著
しい遠回りになる。この点について嘉平氏に確認し
たところ、地名に誤りはないとのことであった。
- ④註①文献。ここに登場する庄三郎氏は庄三エ門氏と
同人物で、かつては本名ばかりでなく屋号や先代の
名前で呼ばれることも多かったという（嘉平氏談）。
- ⑤嘉平氏の言葉。「麦の粒のような形の」という意味。

- ⑥宮尾英一氏らの協力を得て、26貫まで測定できる天
秤にて重量の測定を試みたが、力持石はその性能の
限界をはるかにこえていた。嘉平氏の言うように36
貫くらいの重量はあるらしい。なお英一氏によると
第2次大戦の金属供出で円明寺の釣鐘を失ったとき、
鐘楼のバランスをとるため、この力持石を釣鐘のか
わりに釣り下げていたという。
- ⑦力持石になり得る、こうした条件を備えた石は必ず
しも多くはなかったらしく、大東町の東隣の長浜市
今川町では五輪塔の塔身が転用されていた（小川実
氏談）。また彦根市普光寺町では、米の重量を基準に
して、重量階級別に複数の力持石があり、かつて盛
んだった草相撲の余興にも使用されていたという
（寺田藤吾氏談）。
- ⑧持ち上げられる人がいたというばかりでなく、この
力持石は約17kmの道程を人力で運ばれてきた。
- ⑨宮本常一「名倉談義」（『忘れられた日本人』岩波書
店P75 1982）繁雑さを避けるため、省略した箇所
がある。

215. 長浜市石田町の

唐戸橋について

「米は買はねど垣籠の、保田酒一杯しょう福寺、水で
字をかく堀部村、かたいは石田のからと橋」云々と俗
謡に唄われた唐戸橋は、もとは長浜市石田町の朽木街
道にあり、「廣さ三尺餘、長さ四尺餘りの一石と方二尺
餘りの石とを二ヶ所の小川に架せし石橋」でありまし
た。昭和のはじめ頃には橋としての役目を終えて、約
300m北側にある石田町の八幡神社の境内に移されま
した。

石田町は石田三成の出身地で、八幡神社はその石田
一族の氏神とされ、社殿の北側には「天文十四年正月
十四日妙性口位」「永録五年6月」などの銘のある一石
五輪塔などが、石田家供養塔に安置されています。唐
戸橋は現在、その供養塔と社殿との間に置かれていま
すが、石が橋として本来架けられていた街道の呼称は、
皮肉にも石田三成が没落した関ヶ原の戦いで、西軍から
東軍に転じた湖西の朽木元綱の軍勢が、その戦に向
かうために通過したことに由来するとされています。

その唐戸橋は実は組合式石棺の部材で、石材は暗灰
色を呈す凝灰岩と推測されます。規模は短辺の一方が
破面を晒すものの、残存部の最大長約264cm、最大幅約
129cm、最大厚約19cmを測り、板状の形状を呈していま
す。長辺の両側が段差約5cmの段状に加工されている
ことから、蓋材の可能性が指摘されます。

『平成2年度滋賀県遺跡地図』等では、橋として所在
した小字の名称から、古墳としての実態は確認されな
いもの上雑付古墳として登録されています。しかし
ながら当地を南縁として、これより北側には12基の前
方後円墳を含む坂田古墳群が所在することから、ある
いはこれらの古墳から搬出された可能性を考慮したほ
うがよいかもしれません。（北村 圭弘）

*主として坂田郡教育会 1912年『近江坂田郡志』下
巻P708および同1941年『改訂近江国坂田郡志』第四
巻P708を参考とした。



八幡神社境内の唐戸橋